ビヨンドコロナの大学戦略

中京学院大学
林勇人学長

−43−

岐阜県に立地する中京学院大学（林勇人学長、経営学部、看護学部、短大保育科、健康栄養学科）は、何人ものプロ野球選手を輩出するなど強豪の運動部が多く、全国から学生が集まる。一方、新たな大学の動きとして、地域課題に取り組み始めている。学内ではどのような改革が進行しているのか、林学長に聞いた。

スポーツの強み活かして地域で取組む

独自の「真剣味サイクル」で学生を育成

○スポーツ学生の強みを活かす

各学部は、保育士、栄養士、看護師不足、地元の企業人育成など、地域からの要請があって設置された。現在、東濃地域は、岐阜県でも18歳人口の減少が最も激しい地域であるため、地域から大学にかかる期待も大きい。

2020年法人分離を契機に策定した「中期計画2020」に基づき、「学生の主体性に基づく成長実感の体現」を前提条件とし「人生100年時代」の到来を踏まえ、自立した存在として実社会に寄与する人財の育成を進めるとともに、地域にある唯一の高等教育機関としてあるべき姿を検討し、地域交流、高大連携を推進するための「東濃まるごとキャンパス」の実現を計画の基軸とし、次の5項目を重点目標として定めた。①学生（園児）が主体性を持って成長実感を体現できる教育の実践、②各専門分野における最新知見を兼ね備えたプロフェッショナル精神の醸成、③東濃地区との強固な連携、④生涯教育の拠点となる「学びの場」の創設、⑤計画推進を下支えし、安定稼働に導く経営基盤の強化である。

また、同年にはコンセプトコピーを「いつも学生とともに~Here is second home for you~」と決定し、目指す方向性や教育方針を示した。

「これには、創立者の安達壽雄先生が語られた『学園に集う私たちは家族であり、学生には我が子同様の愛情を持って教育にあたってほしい』との思いと、先人たちが長年にわたって築いた『学生と教職員の距離の近い』学風が示されています。本学で成長した未知の自分と出会い、『第二の家』『故郷』として、誰もが安心して戻って来られる場所にしたいと思っています」。

教学改革が本格化したのは林学長が就任してからで、林学長がまず急いだのは、スポーツ系学生の支援だった。

「経営学部は、全国から集まったスポーツを頑張る学生が6割を占めます。野球などはもちろん、全員がプロのプレイヤーになれるわけではなく、レギュラーとしてベンチ入りできるメンバーも限られています。様々な理由から途中で挫折して競技生活をあきらめてしまう学生もいますが、これまで彼らに他の道を示せずにいました。そこで、スポーツを通じて東濃地域を支援する、総合型地域スポーツクラブ『中京学院大学クラブ』を設立して、新たな学びのフィールドを構築しました。スポーツを行う学生と地域の接点を作りたかったのです。プロやレギュラーになることをあきらめたとしても、彼らはこれまで培ったリーダーシップやチーム力など大変光るものを持っています。これらをきちんと自己認識して再チャレンジできるフィールドをたくさん作りたいと考えています。だから教員には、日ごろから『学業とスポーツは切り離さないでほしい。授業がスポーツとどのように結びついているかを語り、学生の目標に向かって伴走してほしい』と伝えています」。

中期計画に掲げた「地域連携の強化」とも絡め、経営学部では地元の6事業所が持つそれぞれの課題をプレゼンしてもらい、その課題解決を図る教育を開始している。

さらに、スポーツの経験を活かした地域イベントの運営などを行い、これをカリキュラムとして体系化したのが、2024年度から始まる『Swingプログラム』と『地域イノベーションプログラム』である。

Swing（Sports Well-being）プログラムは、スポーツを教材としたビジネスへの理解を深めるとともに、「アクティブチャイルドプログラム」などスポーツ指導者の資格取得や、スポーツをテーマにした学内外のイベントの発案など、地域活性化に資する学びとなっている。

地域イノベーションプログラムは、東濃地域の実課題を教材に産業界や自治体と連携しながら実践的な力を身につけるもの。特に経営学部ではドローン操作の講習を必修化し、ドローンを用いて地域課題を解決できる選択肢も用意している。

○真剣味サイクル

林学長はまた、教学マネジメント構築にも力を入れる。

「学修者目線で教育を捉えなおす根本的な変化を教職員に求めています。具体的には、学生個人（「真剣味サイクル」）、科目レベル、学部・学科レベル、全学レベルの4つのサイクルをそれぞれ回していきます。科目レベルから全学レベルのサイクルの評価については、私はIR室長を兼ねており、様々な調査・アンケートを実施して分析を行い、月に一度のレポートの発行や広報誌を作って教職員に示しています。経営学部は第一希望の就職率、看護学部は国試合格率をKPIとして、FDやSDなどで改善につなげていく文化が学内に醸成できるように力を入れています」。

林学長は更に、人財育成の過程を「真剣味サイクル」によって表し、大学で育成する「4つの力と11の要素」を定義した。これは、①コミュニケーション力（規律性、傾聴力、表現力、フレンドシップ力）、②思考力（リフレクション力、計画性、創造力）、③セルフモチベーション力（主体性、まごころ力）、④行動力（挑戦力、貫徹力）である。

「『4つの力』の中では、真剣味サイクルの考え方に基づき、コミュニケーション力を全ての教育の基盤としながら、『リフレクション力』を重視しています。リフレクションは、1、2年のゼミにおいて、『いつともPlanner』というツールを用いて自己分析させつつ、学生生活の目標を書かせ、振り返りの機会を意図的に設定しています。また『11の要素』は、それぞれの項目で作成したルーブリックと照らし合わせて、担任教員とコミュニケーションをとりながら自己評価をして、成長を確認してもらいます。そしてこのような成長過程を『真剣味サイクル』として表しています」。

今後、地域の中で幅広い年齢層の方たちと交流することで、自分への気づきもあるだろう。また多くのスポーツ系の学生は、スポーツの中で社会的能力を身につけていたとしても、それに気づいていない。リフレクションはまさにスポーツ系の学生だからこそ意識的に行うべきとも言えよう。

○トップ自ら試行錯誤

林学長はインタビューの中で、何度も建学の精神の重要性を強調した。大学に赴任する前は分離前の学校法人安達学園中京高等学校の教師や校長を務めており、私立学校歴は40年以上と長い。だからこそ、建学の精神に根差す教育の大切さを誰よりも実感している。この建学の精神、そして、コンセプトを常に根底に置きつつ緻密な教学マネジメントシステムを組み上げている。こうした取り組みは、「ようこそ学長室へ」というブログや学長ワークショップを開催して学内外に周知している。

「建学の精神である『学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ』をもとに、この東濃地域だからこそ学べる教育を考えなければなりません。18歳人口の減少に対して、この東濃地域で必要不可欠な高等教育機関として認知してもらえるよう、安達幸成理事長も私も、考えうるアイディアは即実行し、うまくいかなければ止めて、うまくいくなら続けていくという姿勢でいます。建学の精神を道標として、新たな教育に挑戦する姿勢を常に持ち続け、教育が停滞せずに時代の変化に柔軟に対応できるようにしたいと思っています」。

例えば、岐阜県は、航空宇宙産業が盛んである地域の強みを活かし、また、特に大都市名古屋との差別化としてドローン産業の研究会を1月に立ち上げた。こうしたドローン強化の県方針から、安達理事長は大学としてもドローンを取り入れたいと提案。

2024年度から経営学部ではドローン技術の習得が必須になり、地域課題解決に結び付けられるようになる。

「学生と常に一緒にいて、新しいことにみんなでチャレンジするのが好きなんです。周りは大変かもしれませんが…」と笑うが、トップが動いているうちに巻き込まれていく教職員、あるいは学生も増えていくことだろう。

全国から集まる特にスポーツに取り組む学生が、岐阜県の地域課題に自分の強みを活かして貢献する…中京学院大学は、トップ自らが「真剣味」をもって地域と学生に向き合い、改革を推し進めているのである。

中津川リレーマラソンに参加

教育学術新聞（2023/9/20）記事　※HP掲載許諾済み